

石井忠雄作「**気がつけば愛**」

<前編>

- (効果音) (教会内のガヤ)
- 友人 A ハツパ、結婚おめでとう。本当によかったね。
- 浦野葉子 ありがとう。
- 友人B もう寂^{さみ}しくないわね。
- 葉子 ええ。イエス様がいつも一緒にいてくれるし、その上、彼もね。
- 友人 A へえ。ごちそうさま。
- 友人 B そろそろ時間でしょ。式場のほうに行かなければ。それじゃお幸せにね。
- (効果音) (式場のガヤ)
- 牧師 それではただいまより、高橋雅人、浦野葉子二人の結婚式を執り行います。
新婦入場！
- (音楽) (結婚行進曲)
- 葉子ナレーション わたしはハツパこと浦野葉子、21 歳。そう、わたしの名前、“葉っぱの子”と書いて“葉子”というんです。今わたしは純白のウェディングドレスに身を包んで、ヴァージンロードを歩いています。わたしはこうして教会で結婚式を挙げ、同じイエス・キリストを信じる彼とともに、新しい歩みに踏み出そうとしているのです。こんなにすばらしい人生があるなんて、ほんの数年前、高校時代のわたしには考えることすらできませんでした。わたしの入ったのは商業高校でしたが、統率力にも男勝りだったわたしは、陸上部の部長を務めていました。けれども、家庭のある出来事のために、表面は明るく楽しく振る舞いながら、心の中はただむなしく、荒れた生活を送っていました。都大会も間近に迫ったある日――
- (効果音) (陸上部の部室の戸が開く音)
- 部員A 部長、ここにいたんですか。ずいぶん探したんスよ。それにしても今日はサエない顔してますね。
- 葉子 うるさいわねえ。人のことなんかほうっておいてよ。それより練習のほうはどうなってるの？
- 部員A 終わりましたよ。でも部長が出てこないんだもの、帰れやしない。
- 葉子 しょうがないね。わたしがいなければ何もできないのかね。
- 部員B ああ部長、ここにいたんスか。今みんなを帰しましたよ。だけど部長、今日はどうしたんスか？
- 葉子 みんな、うるさいわねえ。もう終わったんだろう？ 君たちも帰りなよ。

部員B 部長は？

部員A そうですよ。おれたち、部長を置いて帰れやしないスよ。

葉子 (少し間)じゃ、今夜は一緒に飲まないか？

部員A え、部長、いいんですか？

部員B おれたち、未成年だもんな。

葉子 何かマトってるんだよ。2人ともこっそりやってんだらう？

部員B あーあ、何でもお見通しか。かなわねえや。

葉子 じゃ、どこにしようか。バーやスナックじゃヤバいもんな。

部員B おれ、いいとこ知ってますよ。おれのダチのアパートが空いてるんですよ。ちょっと電話してきます。

(効果音) (ドアを開けて出ていく。)

部員A だけどやっぱ支部長、今日はおかしいですね。

葉子 そうかい？ いつもと変わらないと思うけど。

部員A そうは思いませんね。何かあったんじゃないスか？ 男にフラれたとか。一体だれです、相手は？

葉子 おい、早とちりすんじゃないよ。ちょっと家でゴタゴタがあつてね。それでムシクシヤしてるのさ。

部員A へえー。なんスか、そのゴタゴタって？

(効果音) (Bが戻り戸を開ける音)

部員B いいってさ。やつも一緒に付き合うって。

部員A そりゃいいや。今夜は大いにやろう。

(音楽) (アパートの一室。激しいロック。)

部員B 部長はビールですか、ウイスキーですか？

部員A 決まってるじゃん。ウイスキーの水割りだよ。濃いやつ。

部員B じゃ、今夜は部長の健康と幸せを願って乾杯！

部員A 部長、さっきの続きだけどさ、家のゴタゴタってなんスか？

葉子 うん。締まらない話だけど、母がさ、家に男を連れてきたんだよ。

部員A へえー。それで？

葉子 それで、夜中に二人でイチャついちゃってさ、頭に来たからそいつに「出ていけ！」ってどなっちゃったんだ。そうしたら、「二人は愛し合っているんだもん、いいじゃない」なあんて抜かすんだもの。だって、父が死んでから、まだ何年もたっていないんだよ。

部員A 部長のおばさん、ずいぶんとンでいるんですね。女盛りだし。

葉子 冗談じゃないよ。不潔だよ、あいつら。

部員B (酔って)おい、藤田。お前、部長とそこでなに話してるんだあ？部長、今夜はパーッとやりましょう、パーッと。」

ナレーション わたしの母は、若くして父に死なれ、子供を抱え、外に働きに出なければなりませんでした。母が内心どんなに寂しく、不安であったか。職場で優しくされた男性に、つい寄りかかってしまった母の気持ちが、今のわたしにはよく分かるのです。でも、その時のわたしは、尊敬し信頼していた母だけに、裏切られたような気持ちで、心の中に大きな穴が開いたようでした。なんだか何も信じられなくなり、いつしかお酒の味を覚え、男友達と遊び歩くようになったのです。そんなある日の放課後、学校で。—

(効果音) (学校の休み時間のガヤ)

金井純子 あ、ハツパ。

葉子 あ、純子。久しぶり。同じ学校にいて、しばらく会わなかったね。

ナレーション それは、高1の時親友だった、金井純子でした。

純子 葉子、このごろどうしてる？ 陸上部は都大会に出たって聞いたけど。

葉子 うん。でも準決勝でダメだったの。

純子 でも、青春を汗と涙で飾るなんて、すてきじゃない。

葉子 まあね。精一杯やったから。だけど楽しいことばっかしじゃないよ。もっともあんたには、人の悩みなんか分からないでしょうね。

純子 どうして？

葉子 だってさ、いつも幸せそうな顔してるんだもの。

純子 そう見える？

葉子 見える。

純子 そう。でも、わたしにも悩みや苦しみがあるのよ。実は、わたしの父が今がんで入院してるの。もう助からないかもしれないの。

葉子 え！ がん？ そう…。わたしの父もがんで死んだわ。

純子 そうなの。でも、わたしは父の病気のために祈っているのよ。

葉子 祈っているって？

純子 そうよ。イエス様に祈っているの。

葉子 あなた、クリスチャン？

純子 ええ。

葉子 そう。わたしも小学生のころ、教会学校に行っていたことがあるわ。

純子 じゃ、もう一度行ってみない？

葉子 懐かしいなあ。一度行ってみようかな。

ナレーション こうして、わたしは、純子に誘われて、久しぶりに教会に行ってみたのです。

(効果音) (教会のガヤ)

(音楽) (オルガン)

教会員 A ようこそいらっしゃいました。

純子 浦野葉子さん。わたしの友達です。

葉子 浦野です。よろしくお願いします。

教会員 A 礼拝が始まりますから、中のほうにお入りください。

葉子 ねえ、こんなところに座っちゃって大丈夫かなあ。なんか怖いみたい。

純子 平気よ。わたしがそばにいるから。

牧師 皆さん。人は皆罪を犯しているのです、神様の前に出ることができません。人の悩み、苦しみ、様々な問題の原因もこの罪にあるのです。その罪を解決するために、イエス・キリストはこの世に来られ、罪の身代わりとして十字架にかかられたのです。このイエス・キリストを救い主として信じ受け入れるとき、罪から解放され、あなたは変えられるのです。

葉子モノローグ 本当にかなあ。わたし、今の生活がイヤでも、自分ではどうすることもできない。でも、信じただけで変わるかしら？ もし本当なら…。

純子 ハッパ、どうだった？

葉子 ああ。なんだか心が洗われたような気持ちでしたわ。

純子 じゃあ、思い切ってイエス様を信じてみない？

葉子 運。でもちょっと待って。少し考えさせてよ。

ナレーション わたしの心はかなり動きました。でも、信じてしまったら、自分の好きなことができなくなってしまうという思いもあったのです。そこで、そのことを自分が一番信頼していた陸上部の先輩に相談してみることにしました。

(音楽) (喫茶店のムード音楽)

葉子 先輩、こんなところに呼び出してすみません。

先輩 ハッパ、なんだよ？

葉子 実はわたし、この間、教会に行ったんです。

先輩 教会？ 天理教のか？

葉子 いいえ、キリスト教です。

先輩 それで？

葉子 わたし、小さい時にも教会に通っていたことがあるんです。それで、クリスチャンになろうと思うんですけど。

先輩 ふーん。キリスト教ね。あんなものは、弱い者がやるもんだって。それにさ、ヤソなんかになってみろ。たたりがあろぞ。おれの友達で、ヤソになったが、やれ大学には落ちるわ、家に病人が出るわで、散々な目に遭った。

葉子 本当ですか？ わたしは、そうは感じませんでしたけれど。

先輩 なんでも始めはよく思うものだよ。でも、気がついたときは遅いんだ。何も、わざわざ外国の宗教を信仰することはないだろう。日本にだって立派な宗教はあるんだ。どうだい。おれの学会に来ないか？ 悩みなんか吹っ飛んで幸せになれるぞ。ヤソなんか、おれが許さないからな。

葉子 わたしは、その先輩の言葉を聞いて、それっきり教会に行くのはやめてしまい

ました。まるで、暗やみの中に一筋の光を見失ったように、それからのわたしは、生きることの喜びを知らない毎日の中で、果てのないむなしさの中にのめりこんでいきました。

<後編>

- ナレーション わたしが、教会にも行かず、すさんだ毎日を送っていたある日、学校の廊下で、私を教会に誘ってくれた友人の純子にバツタリと会ったのです。
- 純子 どうしたのさ、ハッパ。あのあと、教会に来ないけど。教会の人たち、みんな心配しているんだよ。わたしさ、教会の人から手紙預かってきたわよ。
- 葉子 手紙？ え～、こんな長い手紙、わたしまだもらったことない。
- (効果音) (手紙を開く音)
- 葉子 えっと。「み名をあがめます。浦野さん、お元気ですか？ あのあと教会に見えないので心配しています。(教会の女性の声に変わる)わたしたち、あなたと話をし、あなたが自分の弱さに悩んでおられることを知り、祈っています。わたしたち人間の心は、みんな醜く弱いのですが、イエス様は、そのことをすべてご存じの上で、わたしたちを受け入れてくださるのです。あなたも、自分の心をイエス様に明け渡してみませんか？」
- イエス様か…。わたしは、本当は教会に行きたいんだよね。でも、自分の本当の姿を知られたくないし。教会の人たちは、皆立派な人たちなんだもの。でも、イエス様が、わたしのこと、みんな知っているのなら…。もう一度、教会に行ってみようかな。
- ナレーション そしてわたしは、再び教会に通うようになりました。でも、教会では精一杯いい子ぶっても、今までの生活は相変わらず続けていたのです。
- その夏のある日曜日のことでした。礼拝が終わったあとで――。
- カウンセラー 浦野さん。Hi-BAのキャンプに行かない？ 上総一ノ宮海岸。泳げるわよ。
- 葉子 海岸のキャンプ？ いいですね。行きます。
- ナレーション わたしは、海のキャンプと聞いて、いとも簡単に決めてしまいました。でも、このキャンプで自分の一番大切なものを発見しようとは思っても見ませんでした。キャンプの数日間は楽しく過ぎていきましたが、明日はもう帰るという最後の夜のこと――。
- (効果音) (波の音)
- カウンセラー 浦野さん、あなた、イエス様を信じていますか？
- 葉子 いいえ、まだ。“神の子だ”って言われれば、そうかもしれないって思うんだけど、いまいちピンと来ないっていうか。自分には関係ないっていう感じで…。
- カウンセラー じゃ、あなた、自分は罪びとだって認められる？
- 葉子 え？ ええ。わたしは、いろんなことをやりましたから。人には言えないようなこ

とも。

カウンセラー それじゃあ、自分はそれでいいと思ってるの？

葉子 それは…。自分でもどうにかしなければと思っています。でも、努力してもそんなにガラッと変わるわけじゃないし。そう考えると、なんだか努力することがむなしくて、自分が好きなようにやっていくのが一番いいんじゃないかと思って。

カウンセラー そう。そんな悩みをあなた、だれかに話したことがある？ だれか、本当に信頼できる人、いる？

葉子 いいえ。自分のことを本当に知っていて、親身になって考えてくれる人は一人もいません。わたしの本当の姿を知ったなら、まじめな人なら、たいてい愛想を尽かしてしまいます。

カウンセラー ねえ、聖書のここんとこ(パラパラめくる)、ヨハネ3:16には、「神は、その一人子をお与えになったほどに、世を愛された。」って書いてあるでしょ？ わたしたちみたいな罪びとを、そのまま愛し、受け入れてくださる方。その方がイエス様なの。イエス様は、そんなわたしたちのために命さえ捨てて、愛してくださったのよ。そのイエス様を救い主として信じ受け入れるなら、あなたも罪から解放されるのよ。むなしさからも、人を憎む心からも—。

葉子 わたしみたいな人間でもですか？ わたしのように罪深くてですか？ わたしのように弱い人間でもいいんですか？

葉子(祈り) (泣きながら)イエス様、わたしはあなたのために何もしてきませんでした。いいえ、イエス様の嫌がるようなことばかりしてきたのです。どうぞ赦してください。神様、こんなわたしのために十字架で死んでくださってありがとうございます。信じます。どうか、何も分かりませんが、わたしを助けてください。

カウンセラー 浦野さん。あなたは今、心を開いて、イエス様を迎え入れたわね。もうイエス様は、あなたをしっかりと捕らえてくださったわよ。これからは、どんな苦しいときも、つらいときも、イエス様はあなたと一緒によ。

ナレーション わたしは、その年のクリスマスに、バプテスマを受け、程なく教会学校の教師になりました。かつて、幼い日に、わたしにイエス様のことを教えてくれた優しい先生たちの思い出。わたしも今、その大切な仕事をさせていただくことになったのです。

(音楽) (主 我をアイス)

ナレーション それから間もなく、わたしは同じ教会学校の先生をしていた高橋さんという男性に、いつしか心引かれている自分に気づきました。彼もわたしに好意を示してくれました。長い間、人間不信に陥っていたわたしは、今、イエス様を通して本当に人を愛するようになったのです。二人はお付き合いを始めました。しかし、わたしの心はずききました。わたしが今までどんな悪いことをしてきたか、

彼は知らないのです。ある冬の日、彼は、わたしを鎌倉海岸に誘いました。

(効果音)

(波の音)

高橋雅人

冬の海は、人もいなくて、大自然そのものって感じだね。

葉子

ほんと。あの波を見ていると、心が大きくなって、毎日の問題なんて忘れてしまおうわ。

雅人

(間)(思い切って)浦野さん。僕ね、前から君に聞こうと思っていたんだが、君は僕のこと、どう思ってる？

葉子

高橋君のこと？ そうね、とてもすてきな人だと思うわ。

雅人

それだけかい？

葉子

それだけって…。それじゃ高橋君は、わたしのことをどう思っているの？

雅人

君はしっかりしていて、とても優しく、すてきな人だ。(間)ねえ、僕と結婚してくれないか？

葉子

え、結婚？

雅人

僕のこと、嫌いかい？

葉子

ううん。…好きです。

雅人

じゃあ、いいだろ。僕は今、大学生。君はまだ就職したばかりだ。すぐには言わない。二人で生活の基礎を築いてからでいいんだ。

ナレーション

その時、わたしの心は凍りついたようになってしまいました。

葉子モノローグ

(エコー)果たして、わたしに彼の愛を受け入れる資格があるのだろうか？ この世では、過去のことは隠して、分からなければそれで済ませてしまうのが普通だわ。でも、クリスチャンとしてのわたしは、どうしたらいいの？ 今までわたしは彼をだまし続けてきたよう泣きがする。でも、わたしが本当のことを言って、彼に嫌われたら？ ああイエス様、助けて！

ナレーション

その時でした。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを閉め出します。」このみ言葉とともに、わたしの心には、不思議と真実を告げる勇気がわいてきたのです。もし、このことで、彼の愛を失うなら、それはそれでいいとさえ思いました。

葉子

高橋君。これからわたしが話すこと、驚かないでね。わたしは、あなたが考えているような、しっかり者の優しい女じゃないの。お酒、タバコ、男遊び、自分の好き放題のことをやってきた女なのよ。あなたには、ずっと黙っていていごめんなさい。あなたから優しくされればされるほど、わたし、苦しくてどうしても言えなかったの。

雅人

すべての人は罪を犯している。浦野さん、それは君ばかりじゃないよ。僕も、君と同じ罪びとなんだ。君は前に、イエス様は罪びとをそのまま受け入れてくれるって話してくれたよね。僕も、人にはいえない醜い罪を持っている。それなのにイエス様は受け入れ、救ってくれたんだ。僕たちは罪びと同士だよ、浦野さ

ん。神様の栄光を表すために、二人して、この体を神様にささげよう。ねえ、祈ろう。

ナレーション

わたしたち二人は、日が沈んだ波打ち際にひざまずいて、祈りました。イエス様がわたしを受け入れてくださったように、彼も、こんなわたしをイエス・キリストにあって、ありのままで受け入れてくれた。わたしは、胸が張り裂けんばかりの喜びでいっぱいでした。いつしか辺りに夕やみが立ち込めて、海から吹きつける風はもう冷たくなっていました。でも、あふれ出るように祈り続けるわたしたちの心は、主イエス・キリストへの賛美と感謝で、熱く燃えていたのです。

<完>